

No

42

難しいと思ったこともすぐに投げ出さずに取り組もうとする。

…人とかかわり…

チャレンジ！ 仲間とはげましあって困難を乗り越える 2月

☆ 視点に関わる背景（4月からの状況） ☆

4月になり、進級すると年長としての活動や運動への取り組みに対して意欲が見られるようになる。保育者は、年長児の活動として、跳び箱の活動を取り入れることを念頭におき、年間を通じて、足腰や背筋を強くする活動を積極的に取り入れるようにしている。

☆ 接続期の状況（クラス活動の時間～） ☆

| 子どもの姿・子ども同士のかかわり | 保育者の援助・視点 |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> 子どもたち全員の話し合いの中で、卒園式当日の活動の中で、園での思い出の紙芝居とリズム・跳び箱を行うことを決めた。 跳び箱を自分たちで用意し、跳ぶ段数・跳び板の位置を自ら決め、跳び箱に挑戦する姿が見られるようになった。 ある日の跳び箱の時間、子どもたちは自分の番が来るまでマットサイドに正座し、友だちの跳ぶ姿を真剣に見ていた。 保育者は、卒園式での昨年度の年長児の姿も話しながら、子ども達の意見を引き出すようにした。 以前跳べた段数を生き生きとした表情で跳んでいく子ども達の中に、跳び箱の前に一歩踏み出せずに躊躇している子（A）がいる。 | |
| <ul style="list-style-type: none"> Aは、皆と同じ段数が跳べなかったため、専用の跳び箱を自ら設置し、一人黙々と跳び箱に向かっていく。 Aは、跳び板の近くにいくと立ち止まってしまい、板を蹴るタイミングがなかなかつかめない。それでも諦めずに挑戦している。 <p style="text-align: center;">↓</p> <ul style="list-style-type: none"> Aの様子を見ていた子が、「僕たちの跳ぶところを見たら出来るんじゃない」と提案する。 提案を受け入れたAは、跳び板の近くに正座し、目を凝らして友だちの跳ぶ様子を見る。 全員が跳び終わった時、Aが、「跳び箱の段数を低くし、跳ばせてほしい。」と申し出る。 他の子全員が、その言葉を受け入れ、Aの様子を見守る。 Aは、他の子全員（仲間）の見守る中、跳び箱に向かう。 Aは、以前より跳び板でのタイミングは掴んだものの、目標とする高さを跳び切れず悩む様子を見せる。 仲間が、「腕の力をつけた・・・雑巾がけしたらいいんじゃない。」という第2の提案をする。 第2の提案を受け入れたAは、再度挑戦する。 <p style="text-align: center;">↓</p> | <ul style="list-style-type: none"> 子ども達の姿を見守り、言葉に出せない子どもの心情を読み取る。 手の置き位置を確認したり、跳び板を蹴るタイミングを知らせたりすることにより、気持ちをリラックスして、目標に向かっていけるように援助した。 |
| <ul style="list-style-type: none"> Aの姿を見て、以前跳んだ跳び箱の段数で躊躇していた子が、「やってみよう！」と自分に言い聞かせるようにして、再度挑戦を始める。 |  |

☆ 接続期の指導場面における配慮事項 ☆

年長児後期は、幼児期の集大成の時期である。乳幼児期から自分の思いを十分に受け入れてもらう中で、自分の思いだけでなく他者の思いにも気付く力が芽生えるとともに、集団で育ち合う力が育まれていく。保育者は、「保育者」とのかかわりだけでなく、「仲間」とのかかわりの中で育まれていく力を信じ、子ども達の姿を見守っていくことを大切にしている。